平成30年12月1日(年6回、4・6・8・10・12・2月の1日発行)　ISSN 2185-8179

～健口と輝く笑顔のために～

歯科衛生だより

2018 December vol.48

発行人／武井 典子
発　行／公益社団法人 日本歯科衛生士会
〒169-0072 東京都新宿区大久保2-11-19
TEL.03(3209)8020　FAX.03(3209)8023
http://www.jdha.or.jp/

口から食べる倖せの追求

「日本歯科衛生学会 第13回学術大会」開催

主催：日本歯科衛生学会、公益社団法人日本歯科衛生士会
共催：一般社団法人福岡県歯科衛生士会
後援：福岡県、福岡市、一般社団法人福岡県歯科医師会、一般社団法人福岡市歯科医師会

2018年9月15日(土)～17日(月・祝)の3日間、福岡国際会議場にて『日本歯科衛生学会 第13回学術大会』が開催されました。今夏は西日本を中心に度重なる大型台風による被害に加え、学術大会開催直前の9月上旬には最大震度7を記録した北海道胆振(いぶり)東部地震が発生するなど、自然災害が多発しました。悪天候も懸念されましたが、会期中の福岡市は好天に恵まれ、1,805名の参加者が集う中、さまざまなプログラムが展開されました。

ここでは、『特別講演』『シンポジウム』、一般の方々も参加された『県民フォーラム』の模様をご紹介します。

■特別講演

栄養状態から考える口腔(こうくう)と全身の健康
―糖尿病と歯周病の関連を中心に―

九州大学大学院 歯学研究院 教授　西村 英紀(ふさのり) 氏

糖尿病は21世紀の国民病

本学術大会初日の16日には、メイン会場での最終プログラムとなった西村英紀氏による「特別講演」があり、アルゼンチン・ブエノスアイレスでの講演から帰国直後にもかかわらず、疲れた様子も見せない西村氏がステージに登壇すると満員の会場から盛大な拍手が送られました。

西村氏は、講演のテーマでもある“糖尿病は21世紀の国民病”であると言及し、今増えているのは生活習慣病の「2型糖尿病」であり、これは現代人の多くが栄養を過剰摂取していることが原因だと紹介されました。

また、過剰栄養になると免疫システムが慢性的に活性化され、炎症に起因する病気(感染症)になりやすいため、感染症として発症する歯周病の重症化を防ぎ、なおかつ生活習慣病の負の連鎖を断ち切るには、年齢ではなく栄養状態で捉えることが重要だと説明されました。

さらには、重症化した歯周病が生活習慣病の進行促進因子として働くことや、重度の歯周炎症が脂肪組織の炎症を助長するため、「歯周病は口の糖尿病」とも言えると話されました。

歯科オリジナルの取り組みが必要

西村氏は、広島県医師会との合同事業によって、炎症を軽減するような治療が糖尿病の血糖改善に寄与することが判明したと紹介されました。また、海外の研究事例から、インスリンを注射するよりも、栄養を経口摂取した方が高いインスリン効果が得られること、すなわち、良く噛むほどインスリン分泌が促進し、糖の細胞への取り込みが向上し低栄養の改善につな

がる細胞の飢餓状態を防ぐことになると解説されました。そのためには口腔機能が正常であることが重要であり、ひいては糖尿病予防につながるとし、今後は口腔機能とインスリン分泌の関連性など、歯科オリジナルの取り組みが大切になると説明されました。

そして、会場を埋め尽くした歯科衛生士に対して、「歯科衛生士さんが全て理解して患者に説明することが大切です。今、歯科衛生士さんには追い風が吹いています。次に続く後輩たちのためにも、新たな道を開く努力を続けてください」とエールを送って講演を締めくくられました。

■シンポジウム

口から食べる倖せの追求 ―地域包括ケア時代の多職種連携―

基調講演 地域包括ケアの時代に歯科衛生士に期待すること

医療法人共和会 小倉リハビリテーション病院 名誉院長　浜村 明徳 氏

小倉リハビリテーション病院の名誉院長で、介護老人保健施設「伸寿苑」の施設長を務める浜村氏の基調講演からシンポジウムがスタートしました。浜村氏は、地域包括ケアという名称ができる前から訪問診療に尽力し、“信念の人”として医療関係者の間では知られる医師です。

浜村氏の講演は、今一度「地域包括ケアとは何か?」というテーマのもと、①地域包括ケアの時代とは、②食べる力を取り戻すリハビリテーションと歯科部門の活動、③私どもの「地域づくり」支援活動、④期待すること、の4項目に関して、自身の経験や「伸寿苑」の取り組みを紹介しながら分かりやすく説明されました。

その中で、「食事とは、同じ世界に属する他人の味覚を共有しながら愉しむこと」というドイツの精神医学者テレンバッハの言葉を紹介し、そもそも人にとって「食べる」ということは、単に栄養補給にとどまらない重要な生活機能の一つであると伝え、リハビリテーションの世界にも歯科は必須であると強調されました。

地域包括ケアは多職種と連携し、それぞれの専門分野の知識をもとに協力することが大切です。その活動の中で、歯科衛生士は予防から終末期まで関われるようになることを期待していますと話を終えられました。

講 演 1・2・3

社会医療法人 原土井病院　歯科部長／摂食・栄養支援部長
岩佐 康行 氏

社会医療法人共愛会 戸畑共立病院　リハビリテーション科 科長
大森 政美 氏

筑紫歯科医師会 歯科医療連携室　相談員・歯科衛生士
髙野 ひろみ 氏

浜村氏の「基調講演」に続き、九州の地で地域包括ケアに取り組む、岩佐康行氏（歯科医師）、大森政美氏（言語聴覚士）、髙野ひろみ氏（歯科衛生士）の3名が登壇されました。

まずは、岩佐康行氏が、「在宅における歯科医師の取り組み」と題し、1997年から開始した訪問治療の実体験を紹介しました。時にユーモアを交えた語り口で、穏やかな雰囲気の中、最後は終末期に向けた歯科による在宅支援が必要とされていること、食べることができるうちに対応すること、継続的な取り組みが重要であると歯科衛生士の協力を呼びかけました。

続いて大森政美氏は、「病院における言語聴覚士の取り組み」と題し、自身が取り組んでいる摂食嚥下障害のある患者さんへのケアを動画や写真を交えて紹介され、また、摂食嚥下評価とリハビリテーションを担当する言語聴覚士の仕事内容を説明するとともに、人材が足りない現状を訴え、摂食嚥下サポートに歯科衛生士の力が必要なことを強調されました。

最後に髙野ひろみ氏は、「地域における歯科衛生士の取り組み ー筑紫地区における在宅歯科医療連携室の活動ー」と題して講演されました。「現在、福岡県では9つの歯科医師会が在宅歯科医療を実施していますが、地域特性に応じた連携システムの整備が急務である」と話されました。

その後、浜村氏を加えた4名によるディスカッションが行われ、会場の参加者からの質問に答える時間が設けられました。それぞれ職種が異なることもあり、質問も多岐にわたるなど参加者にとって有意義なシンポジウムとなりました。

■県民フォーラム

ペコロスの母に会いに

漫画家　岡野 雄一 氏

会期中のプログラムで唯一、一般の方々も参加して行われる『県民フォーラム』。毎回、学術大会の開催地に縁のあるゲストによる、楽しく感動的な講演が好評を得ています。

今回登壇されたのは、長崎市在住の漫画家・岡野雄一氏です。認知症を発症した母との交流を描き、第42回日本漫画家協会賞優秀賞を受賞した作品『ペコロスの母に会いに行く』の作者です。この漫画を原作とした映画『ペコロスの母に会いに行く』は、2013年「第87回キネマ旬報ベスト・テン」において第1位に輝くなど高い評価を受けています。

岡野氏の講演は「この作品は小さな家族の話に終始していますが、認知症は拡大する一方です」の言葉から始まりました。母みつえさんの写真や動画を交えながら、岡野氏の穏やかな語り口調でご自身のことや思いを正直に、時に赤裸々に語られました。

映画でも描かれた、みつえさんが岡野さんの頭をペタペタ叩く印象的なシーンは実際の動画が流され、「母は私の頭を風船だと思っていたようなんです。リハビリで風船を叩くときに数字を数えるのですが、私の頭を叩いている時にも同じように小さな声で数を数えていました」と話された時は、会場が大きな笑いに包まれました。

一方、悩みに悩み、いろいろな人に話を聞くなどしてみつえさんに胃ろうを選択したエピソードの場面では、「それが正しい選択だったのかどうかは分かりません。ただ私は、1日でも長く生きていてほしいから胃ろうを選びました。そこから母が亡くなるまでの1年半は自分にとってかけがえのない大事なときであり、今では、母からいろんなものをもらった芳醇な時間でした」と語り、会場の涙を誘いました。

そんな岡野氏も介護の大変さから、母が死ねばいいと思った時期があったそうです。しかし、ケアマネジャーとの出会いから認知症のイロハを学び、グループホームへの入所を勧められたそうです。その経験から「逃げることも大事だと実感している」という岡野氏は、「何よりも大切なのは命。苦しいときには自分の時間を大切に考え、プチ逃げしてほしい。とにかく生きていれば何とかなります」の言葉で講演を終えられました。

PROFILE

1950年生まれ、長崎県出身。20歳で上京し、漫画雑誌の編集者として出版社勤務していたが、40歳で故郷の長崎に戻る。

長崎ではタウン誌の編集長などを経て、フリーライターとして活動。認知症を発症した母を描いた漫画をまとめた自費出版本がFacebookや口コミで話題となり、第42回日本漫画家協会賞優秀賞を受賞。現在、西日本新聞と「週刊朝日」（朝日新聞出版）にて連載中。作品の主人公である母・光江さんは、2014年に91歳で逝去。

日本歯科医師会の映画「笑顔の向こうに」が来年2月に全国で公開予定！

～中学高校生に歯科衛生士を積極的にPRしましょう～

近年、歯科診療所はもちろん、歯科健診事業や訪問歯科診療、地域包括ケアにおける多職種連携など、さまざまな場面での環境整備と人材確保の充実が求められています。日本歯科医師会では、8020運動30周年を記念して映画「笑顔の向こうに」を製作中です。次世代を担う若者から高齢者までの幅広い世代に、歯科関係職種の魅力を感じとっていただくとともに、歯科衛生士、歯科技工士を目指す学生を増やしていくこと、おいしく食べて、楽しく話す、そしてその先にある笑顔が、口の健康から生まれることを啓発できる映画です。来年2月に日本全国47都道府県にて公開予定です。

中学高校生に歯科衛生士を積極的にPRするとともに、国民に広く口腔の大切さを広げましょう！

（日本歯科衛生士会　会長　武井 典子）

笑顔の向こうに

歯科技工士、歯科衛生士の成長を通した歯科医療現場の心温まるストーリー！

◎ストーリー

大地（高杉真宙）は、23歳の歯科技工士。若いが技術もあり、デンタルクリニックからの信頼は厚い。ある時、デンタルクリニックで、幼馴染で新人の歯科衛生士の真夏（安田聖愛）と再会する。真夏はまだ不慣れだが、患者さんを思う気持ちは人一倍強い。

そんな中、真夏が訪問歯科診療に帯同した寝たきりの患者さんの入れ歯を大地が作ることになるが…。

◎キャスト

高杉真宙、安田聖愛、中村昌也、熊切あさ美、池田鉄洋、佐藤藍子、阿部祐二、辻本祐樹、西方凌、濱田英里、ayanonono、中山秀征（特別出演）、藤田朋子、木村祐一、大平サブロー、秋吉久美子、松原智恵子　他

◎スタッフ

製作：公益社団法人 日本歯科医師会
原案・製作総指揮：瀬古口精良
監修：8020運動30周年記念事業映画製作チーム
エグゼクティブプロデューサー：井内徳次
音楽：フジパシフィックミュージック
配給：テンダープロ／プレシディオ
脚本：川崎龍太　監督：榎本二郎
主題歌：HAND SIGN「ふたりのサイン」（ユニバーサルミュージック）

©公益社団法人 日本歯科医師会